・直鉄は実在の街を舞台として運行する、架空の鉄道・バスです。
・こちらの路線図、時刻表、乗車記は直鉄を物語とした、空想上の設定です。
・実在する地名や施設、交通機関が登場しますが、一切、関係ありません。
・ご理解のない方は、閲覧をご遠慮ください。
・This is a personal imaginary hobby page it does not exist in reality

＊この物語は【第１話　都会の優しさ】をお読みになってからご覧ください。＊

東京の都心、飯田橋にある直鉄職員向けの病院である、東京直鉄病院、内科医の原は救急外来で日直の当番を終えてロッカーへ着替えを行おうとした時である。

アナウンス「内科の原先生、院長室までお出でください」

原「何かあったかな」

そう呟いた原は処置着を着たまま、最上階の院長室へ。

院長「原君、お疲れ様！実は君宛に手紙が来ているんだ。」

院長は一通の茶封筒を原に渡した、宛先が東京直鉄病院宛であったため、既に院長が中身を開封して手紙を読んだ後だった。

中身は白のA4サイズの用紙にパソコンで文字を印刷したものだった。

手紙の送り主は佐崎直哉。

手紙の内容「10年前、2012年の11月に直鉄東京駅構内で倒れて東京直鉄病院へ救急搬送された、佐崎と申します。10年前、救急搬送された時はお世話になりました。おかげさまで今は元気で過ごせています。10年前の当時、私がうつであることで受け入れ先の病院が中々、見つからず救急隊の方も四苦八苦されていましたが、直鉄病院さんが受け入れてくださり事なきを得ました。対応してくださった、看護師の方、もう一人の女性の医師の方、薬剤師の方、原先生、皆さんのお世話になり今の自分があると思います。本当にありがとうございました。お礼を出そうと思い、10年も経ってしまった事をお許しください。それでは失礼いたします」

原「覚えていますよ、ちょうど日直から当直へ引き継ぐ時間に搬送されてきて、私が診た患者さんです。大阪から旅行で来られていて、私が電話で彼のご両親に新大阪駅まで迎えに来て欲しいとお願いしたんです。」

10年前の記憶を一つ一つ思い出しながら当時を語る原。

院長「原君、君も知っていると思うけど当院は苦情も多い。そんな中で遠く離れた、大阪からお礼の手紙を送ってくださって、地域医療として救急でもどんなことも受け入れている当院の存在意義の意味があったんじゃないかな、私はそうおもっているよ。本当にこの手紙はありがたいね。」

原「10年ですか・・・・私も50代になりますよ、佐崎さんはもう30代かな、10年後にお礼の手紙を頂くなんて医師になって初めてですよ、ありがたいです、ちょっと恥ずかしいですけどね。」

原「院長、この手紙を頂いてもいいですか？家に持って帰りたいです、持って帰って手元に置いておきたいんです。」

院長「かまわないよ、わざわざ院長室まで来てくれてありがとう。こちらの患者さんには院長として私から返事を出しておくよ。」

原「ありがとうございます、失礼します。」
院長に一礼して院長室を後にした、原、左手には佐崎からの手紙を握って。

ロッカーに戻って処置着から私服に着替える原。

原「10年、長かったような短かったような、2020年からコロナになって社会のシステムが代わってきている、そんな中でこの手紙を書こうと思ったのは佐崎さん自身に何か良い心境の変化があったのかな、そう、あってほしい。10年前、不安で苦しそうな顔で搬送されてきて、その彼が、今もこうして元気で暮らせている、10年前、その手助けが出来たこと、医者をやっててよかった。」

原はロッカーでそう呟きながら、私服に着替え終わって病院を後にした。

直鉄職員向けの東京直鉄病院は今日も直鉄職員以外でも、外来患者、救急患者を受け入れて、東京という街の地域医療に貢献している。

END